



羅針盤

門野 岳史
Takafumi Kadono

聖マリアンナ医科大学皮膚科 主任教授, Visual Dermatology 編集委員



縁の下の力持ち

Visual Dermatology の部位特集も、手その1・その2に始まって、眼瞼、陰部、口唇、足、爪と続き、第7弾の臀部までたどり着きました。2021年の日本皮膚科学会総会で「好発部位の謎に迫る!」というセッションがあったのですが、そこで四肢・臀部パートを担当したことから、今回の部位特集の責任者として私に白羽の矢が立ちました。手持ちの画像を必死で漁り、いつものごとく、大原編集委員長に多大なご助力を仰ぎ、段々と仕上げに近づいてきています。

臀部は縁の下の力持ちです。歩行の起点となるだけでなく、座位においては荷重を一手に引き受けます。それでいて本人が目にすることはあまりなく（他人の目に触れることはあるかもしれませんが）、黙々と役目を果たしています。

改めて考えると、“おしりで座る”生き物は“ヒト”を含む霊長類以外にあまりいないのではないのでしょうか。イヌ、ネコ、ウサギなどは座っているようにみえますが、荷重を支えるのは後ろ足ですし、臀部の皮下組織はそれほど発達しておらず、毛もふさふさです。一方、サルのおしりはしばしば赤く、皮膚や皮下組織が肥厚し、荷重に耐えうる構造になっています。一方で“ヒト”のおしりは、皮膚が厚く、皮下脂肪や臀筋が発達しています。た

だ掌蹠に比べるとケラチンの種類も違いますし、腱膜も発達していないので、弱点もあります。

“ヒト”が椅子に座る生活様式を取り入れたのはそう昔のことではありません。日本人ではなおさらで、椅子に座る時間がこれほど長くなったのは、オフィスワークが広く定着した戦後ではないでしょうか。そう考えると、“ヒト”のおしりは、現代生活において荷重を一生涯支えるにはやや心許ない感じがします。私も座位で過ごす時間が長く、通学通勤に自転車を40年ほど活用してきたので、おしりがだいぶ痩せてきた気がします。高齢者、とくに男性では、仙骨部や臀裂、坐骨部の真皮や脂肪組織が萎縮し、その反面、表皮の角化と色素沈着を伴う臀部角化性苔癬化局面が高頻度で見られます。個人的には、臀部角化性苔癬化局面は「褥瘡への一里塚」だと思っています。私自身もおしりに対してもう少し優しくならねば。

臀部の皮膚疾患で受診される患者さんは、外見上の問題に加えて、疼痛、痒痒、触ったときの違和感といった知覚の問題を訴えることも多く、それが多彩な臨床像につながります。本特集でご紹介するさまざまな皮疹をぜひ日常臨床にお役立てください。